

# 古墳時代の祭祀遺物、石製模造品

## — 特別展示「おこしやす、古墳時代へ」によせて —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 中久世遺跡から出土した石製模造品

はじめに 京都市考古資料館で2023年7月8日から始まった特別展示「おこしやす、古墳時代へ」。その展示コーナーの片隅に石ころのようなものが並んでいます。この小さな石たちは石製模造品と呼ばれる遺物で、今から約1600年前、古墳時代に作られたものです。滑石や蛇紋岩などの、軟らかくて加工しやすい石材から作られているので、生活道具などの実用的なものにはなりにくく、祭祀の道具に使われていたと考えられています。模造品と呼ばれるだけあって、石製模造品は、様々な器物を模倣しています。鏡、剣、小刀、鎌、斧、履物など、身の回りにある生活道具をミニチュアサイズに作っていました。ここでは、京

都市内の遺跡から出土した石製模造品についてご紹介します。

### 集落遺跡から出る石製模造品

JR桂川駅の東側一帯には、縄文時代から室町時代の遺物が見つかる中久世遺跡が眠っています(図1)。石製模造品は、河川跡の中から見つかりました(写真1)。

板状の石材を直径数cmの円形に加工して、直径2~3mmの孔を1~2個開けたものは、有孔円板と呼ばれ、日本各地の集落遺跡から出土する遺物です。通説では、鏡を簡略化して模倣したものといわれています。鈕を表現した突起がある鏡山古墳出土の鏡形石製模造品と比べると、簡単な構造であることがわかります(図3右上)。

一方、剣形石製模造品と呼ばれるも

のは長辺数cmの細長い短冊状で一端を尖らせており、こちらにも有孔円板と同じく、小さな孔が開けられます。この小さな孔は、紐を通して何かに吊るしていたと考えられています。

写真のものは扁平な板状の石材を加工していますが、古い型式のものだと中心に稜線をつくり、断面形を山なりにして立体的に加工しているものもあります(図2)。模倣



図1 中久世遺跡と鏡山古墳位置図

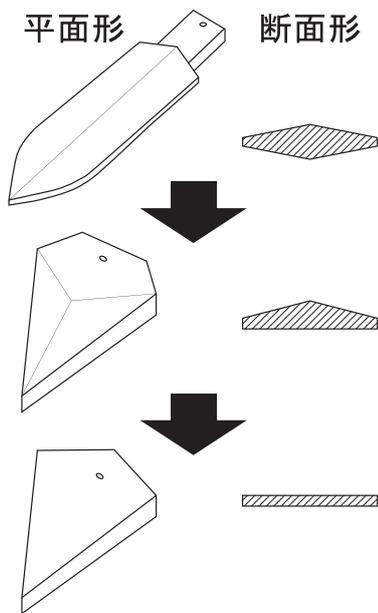


図2 剣形石製模造品の型式変化

して作ったものが、さらに簡略化されてゆくのです。

**古墳から出る石製模造品** 次に、古墳で見られる石製模造品について見てみましょう。

西京区大原野に鏡山古墳と呼ばれる5世紀の古墳がありました。明治時代に発掘が行なわれており、今は跡形も残っていませんが、出土遺物が東京国立博物館に展示されています。出土した石製模造品には、鏡、剣、小刀、鎌、斧、履物など、生活道具を模したものがあります(図3)。

これら生活道具を模した石製模造品は、基本的に古墳の副葬品として出土します。

生活道具を模した石製模造品が多く出土する地域は、大阪府・奈良県を中心とする近畿地方と、群馬県・千葉県などを中心とする関東地方の2つの地域です。

**石製模造品の祭祀** 石製模造品は、遺跡の種類によって模倣する器物の傾向が異なります。

古墳から出土する副葬品は、一般

的には被葬者の性格を表すといわれています。小刀や斧、履物の石製模造品を副葬した鏡山古墳の被葬者は、農業などの生産活動をリードしていたのでしょうか。

また、近畿と関東で同じものを副葬するということは、政権中枢部であった近畿の副葬品の一つとして生まれた石製模造品を、関東の勢力が取り込んだと考えられています。鏡山古墳の被葬者もまた、石製模造品を受容して政権中枢部とのつながりを強めていたのでしょうか。

一方、集落から出土する石製模造品は日本各地で見られ、その性格は、水辺にまつわる祭祀を行っていたと

もいわれています。中久世遺跡出土の石製模造品も、河川跡で祭祀を行なったと考えることができます。生活や農耕に関わる桂川につながる水の流れに、古墳時代の人が畏怖や感謝の祈りを捧げていたのかもしれない。

祭祀遺物には、作った人の思いが込められており、また、その背後にある生活、文化にも繋がります。それらをひも解くことは難しくもありますが、過去を考える上で重要な手がかりでもあります。一見すると地味な遺物ですが、石製模造品の魅力を理解しただけなら幸甚です。

(渡邊 都季哉)

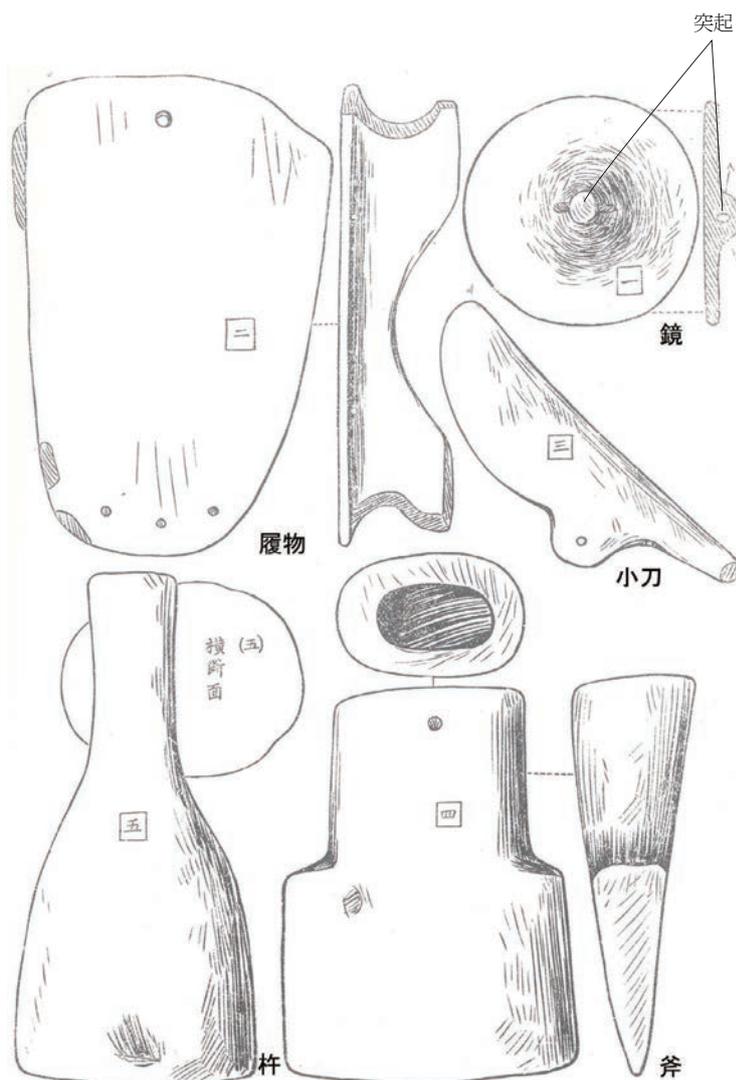


図3 鏡山古墳から出土した石製模造品 (『考古学会雑誌』明治29年に加筆)